日本産アカイエカの種名について

別 宮 久 夫

Bekku, H.: On the specific name of the Japanese house mosquito (*pipiens* group)

自然界で採集した、マライ、レイテ、台中、台北、水俣、諫早、福井、青森及び札幌産並びに実験室内で累代飼育中の台北、沖縄、水俣、諫早及び福井産の *pipiens* group の蚊を形態学的に比較検討した結果について報告する。自然界で採った♀♂の柄室比は南へ行く程短縮し北に行くに従って長くなる。今仮に♀で 350, ♂で 220 を界としてみると、水俣産のものでは♀で f 型:p 型は 39.7%:60.3%, ♂で 48.3:51.7 で中間の値を示し、台湾では f 型が諫早では p 型が多くなる。累代飼育をしたものも略々同様の傾向を示すが、興味のあることには水俣及び諫早産の第 3 代目のものでは♀♂共 p 型が著しく多くなる。次に自然界で採った♂の DV/D 値をみると、水俣を中心として南方へ f 型が北方へ p 型が多くなるが、累代飼育したものでは柄室比の場合とは逆に水俣及び諫早産のもので f 型が多くなる。狭い飼育籠での累代飼育と関係のある淘汰現象ではないかと思う。

♂生殖器 Dorsal arm の先端は定型的な f 型では尖り、p 型では鈍円又は鈍角をなすが、水俣産では DV/D 値の f 型のものの中に先端の f 型のものと p 型のものがあり、DV/D 値が p 型のものの中にも両型が混る。これを ff, fp, pf, pp 型とすると水俣及び諫早産では 30.3:21.2:27.3:21.2 及び 2.1:16.5:2.1:79.3 である。台北及び青森産のものは夫々 ff 型及び pp 型のみである。このように水俣産のものには f 型の形質が濃厚に入っていて ff 型が可成りにあり、幼虫でも定型的な f 型が僅かに見られる。然し水俣産の 1 ♀からの子孫中に上記 4 型が現われることは特記すべきことであり、第 3 代目では 71.9:21.1:3.5:3.5 と ff 型が多くなることは興味がある。又諫早産の累代飼育第 3 代目でも 18.2:33.3:15.2:33.3 と f 型が多くなる傾向が見られる。これらの事実は九州産のものが Hybrid population であることを明示するものである。これより南及び北へ遠ざかるに従って f 及び p の形質が濃く現われる。青森及び札幌産のものは、北米のミシガン *pipiens* と酷似しているが共に北欧の定型的な *pipiens* とは相違点がある。沖縄産については調査不充分であるが累代飼育した♀♂の柄室比には p 型が可成り現われてきている。以上著者は、青森、北海道及び沖縄産のものについては尙正確を期し難い点もあるが、日本産のアカイエカは Hybrid population であり、諸外国の同列のものと

の異同が明らかになる迄は、これを *C. pipiens pallens* とすべきことを提唱する。(長崎大学・風研・衛動)

シナハマダラカ近似群について、

日本産とマレー産の比較

大 鶴 正 満

Otsuru, M.: On *sinensis* group of Anopheline mosquitoes to compare Japanese specimens with Malayan ones

1 昨年, Kuala Lumpur 医学研究所の J. A. Reid の厚意により、マレー産 *hyrcanus* group (*Anopheles sinensis* 外 6 種) の 1 部の幼虫、蛹及び成虫の標本、同群に関する詳細な記載、*A. lesteri* についてはマレー産とフィリッピン産 (Type specimen) との比較資料などを入手することができたので、再び日本産のシナハマダラカ群、特に *lesteri* の同定について検討する機会に恵まれた。今日までの検索の結果では、日本産 *lesteri* は Reid によつて同定されたマレー産の本種と比較してかなりの差異が存在し、特に側面観と浮囊長 (日本産のものは卵上縁が凹、浮囊が極めて長い)、幼虫の触角毛の長さや分岐数 (日本産のものは短く、分岐数 4~7 で少い)、蛹の色調 (日本産のものは、呼吸角と諸剛毛の基部に褐色の色素斑がある)、成虫翅の縁飾先端部の明斑の幅 (マレー産のものは極めて短く、第 1 脈から第 2 脈前枝に亘るのみ) などの諸点をあげることができる。なおマレー産のものは、主として半かん水に棲息する。日本産とフィリッピン産との比較では、浮囊の長さ (日本産のものは極めて長く、気室数が多い)、幼虫と蛹 (上記の日本産とマレー産の差異は、日本産とフィリッピン産の相違に当てはまる)、成虫翅 (日本産のものは、第 1 脈の基部から Remigium にかけて明鱗片が多い) など、その他生態上 (日本産のものは、卵で越冬) にもかなりの差異が存在する。

恐らく日本産の *lesteri* は、マレー産のものとは別種であり、フィリッピン産模式種の亜種とするのが適当と考える。なお日本産の *lesteri* を検索した Reid は、日本産のものはマレー産よりもフィリッピン産に近似している意見である。旧北区に分布する *A. sinensis* の近似種としては、今日までに、わが国には *lesteri*, *yatsu-shiroensis* 及び *sineroides*, 沖縄には *saperoi*, *ohamai*, 朝鮮には *pullus*, 中支那に見出された卵背面の狭小な group (Walch, 桃, 吳) などが記載されている。日本産のシナハマダラカ群もこれら旧北区に分布する近似群、更に東洋区の上記 *hyrcanus* group との関係において、将来検討整理されねばならないと思う。

(新潟大学・医動物)